

## 新羅郷歌<sup>①</sup>に於ける浄土思想

康 東 均

(1)

新羅郷歌を論ずるに当り、まず、その定義を明確にしておかなければならない。郷歌 (hyang-ga) とは、当時の漢詩・漢の歌・中国の歌に対する、新羅の歌・新羅の言葉で詠われた新羅人の歌という意味で、詞惱歌 (seonamnorae — 東国の歌・くにうたの意) ともいわれる。新羅の郷歌は、『三国遺事』に十四首あるのみで、その他は現存しない。高麗時代に入って、均如の「普賢十種願王歌」十一首が伝わっているが、本論では論外とする。

ここでは、特に、浄土思想が備わっているもの二首を選んで考察してみようと思う。本論では、文学的考察は全て先人の功績に頼り、思想的考察を主にしたいと思う。

(2)

『三国遺事』卷五・感通第七、「広徳・嚴莊」条に、次の

ような歌がある。

月よ今、西方まで行き賜い、無量寿仏前に告げて申し賜え。信誓深き尊に仰ぎ、両手を合わせまつりて、願往生、願往生、慕うものありと申し賜え。ああ、この身を遣して置きて、四十八の大願、成就しえようか。

(月下伊底亦、西方念丁去賜里遣、無量寿仏前乃、惱叱古音多可支白遣賜立、誓音深史隱尊衣希仰支、両手集刀花乎白良、願往生願往生、慕人有如白遣賜立、阿邪、此身遣也置遣、四十八大願成遣賜去)。

『三国遺事』には、浄土に往生することを祈念する説話が多くある。しかし、往生を念願する郷歌は、この「願往生歌」一首のみである。この歌は、広徳と嚴莊の二人が、共に往生を願ひ、広徳が先に往生し、嚴莊が後に往生したという往生説話の後の部分に叙述されたものである。

毎夜端身正坐、一声念阿弥陀仏号、或作三十六観、観既熟、明月入戸、時昇其光、跏趺於上。

というように、広徳が阿弥陀仏号を称念し、十六観を作す時にも、月を西方の媒介者として扱っており、前述の「願往生歌」においても、月に托す至誠心を窺うことが出来る。月に托して、「西方浄土の尊——阿弥陀仏に、往生を願ひ、浄土を慕ひ、阿弥陀仏を仰ぐものがあると伝えて」もらいたい心情と、「もしも、私が往生出来ないのであれば、四十八の大願は成就しえないであろう」と、一心にすがる気持——他力本願思想の流れがよく表わされている。

新羅にいつ浄土思想、ないし、浄土系經典が伝来されたかは、現存資料では正確に知ることが出来ない。元暁（六一七～六八六）の『無量寿経宗要』<sup>⑩</sup>等、七世紀の中葉から後半にかけて注釈書が多く著わされているが、それらが直ちに浄土信仰の興起を意味するとはいえない。むしろ、大安（生没年不明、元暁より先輩）が市塵で銅鉢を鳴らしながら仏教の大衆化に努め、元暁が、「無導」という名の大きな瓠の形をした道具を作り、「無導舞」を踊り、「無導歌」を唱いながら愚民を教化したのが、浄土信仰の嚆矢となつたであろう。

この時に唱つた「無導歌」は伝わらないが、これが郷歌であつたらうことは、対象が愚民であることを考えると、疑う余地はない。

(3)

新羅郷歌に於ける浄土思想（康）

『三国遺事』卷五・感通第七、「月明師兜率歌」条に、次のような説話が叙べられている。

「景德王十九年（七六〇）の四月に、二つの日が並び現われ、十日も続いた。月明という縁僧に兜率歌を作らしめると、怪異な日は無くなった（このあと、弥勒に関わる説話が続く）。月明はまた、逝き妹のために郷歌を作り、妹を祭つたことがある。その時、にわかには、つむじ風が起つて、紙銭を吹き飛ばし、紙銭は西の方へ向つて行つた。歌に曰く……」（取意）

この説話を持つ特徴は、先に、弥勒の現世利益を説き、後に、西方往生を説きながら、その表現法は、土俗シャーマンの要素との習合を明らかにしている。このように、弥勒と弥陀が共に説かれたり、土俗信仰と習合された説話、歌謡等は少なくない。また、弥勒と弥陀が共に説かれる場合は、おおむね、弥勒の方が優位に立たせる。これは、新羅浄土教の特色である。代表的な説話としては、『三国遺事』卷三・塔像第四の「南白月二聖、努盼夫得・恒恒朴朴」条の説話を挙げることが出来る。

前述の月明師の説話に続き、「祭亡妹歌」が紹介される。

生死の路は、ここにありと懼れて、我は行くとの言葉も、語り尽さずして行くのか。ある秋の早き風に、此方に彼方に落ちる木の葉を、一つの枝より出でて、行くところ知らず。ああ、弥陀刹にて逢うべき我は、道修め待たん。

（生死路隱、此矣有阿末次朕伊遣、吾隱去内如辞叱都、毛如云遣去内尼叱古、於内秋察早隱風末、此矣彼矣浮良落戸葉如、一等隱枝良出古、去奴隱処毛冬乎丁、阿也、弥陀利良逢乎吾、道修良待是古如）

前述の「願往生歌」は、願往生、願往生と、ただ、ひたすらに西方往生を請ひ願っているのに較べ、この「祭亡妹歌」は、妹をなくした現世の悲しみを抑えきれない、庶民的な人間味を感じさせる歌である。他力本願的な一面もなければ、凡夫としての自覚もない。このような浄土観があるということは、新羅の浄土思想を窺うに当り、また、越えなければならぬ課題の一つになるであろう。

「祭亡妹歌」に続き、月明師の人となりを次のように述べている。

明常居<sup>ヘニシ</sup>四天王寺<sup>ニ</sup>、善吹<sup>シ</sup>笛<sup>ヲ</sup>、嘗<sup>チ</sup>月夜吹<sup>キ</sup>、過<sup>リ</sup>三門<sup>ヲ</sup>前大路<sup>ヲ</sup>、月馭<sup>ヘ</sup>為<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>停<sup>ム</sup>レ輪<sup>ヲ</sup>、因<sup>リ</sup>名<sup>ニ</sup>其路<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>二月明里<sup>ニ</sup>、師亦<sup>チ</sup>以<sup>テ</sup>是著名<sup>ナリ</sup>、師即能俊大師之門人也、羅人尚<sup>ニ</sup>郷歌<sup>ニ</sup>尚<sup>シ</sup>矣、蓋詩頌之類歟、故往往<sup>ニ</sup>能感<sup>ニ</sup>動<sup>ス</sup>天地鬼神<sup>ヲ</sup>者非<sup>ズ</sup>ニ、讚<sup>ム</sup>曰<sup>ク</sup>、風送<sup>リ</sup>飛錢<sup>ニ</sup>資<sup>ニ</sup>逝妹<sup>ヲ</sup>、笛<sup>ヲ</sup>搖<sup>リ</sup>明月<sup>ニ</sup>住<sup>ニ</sup>姮娥<sup>ニ</sup>、莫<sup>ク</sup>言<sup>フ</sup>兜率連<sup>ニ</sup>天遠<sup>ニ</sup>、万徳花迎<sup>ニ</sup>一曲歌<sup>ニ</sup>。

郷歌を作つて妹を祭れば、紙銭が西方に向いて妹の路銀となり、笛を吹けば月も停まる——きわめて人間的な俗っぽさを丸出しにした、一種の親近感を思わせるものである。難しい教義的なことは何一つ表わさずに、歌つて、踊つて、笛を

吹けば、兜率も極楽も近くにある。——ホラ、ここじゃないか——と語つてるようで、聞く人をして感動させる。そのような魅力を感じさせるものである。

(4)

新羅の郷歌は、新羅の歌であり、その殆んどが神秘的要素を含み、土俗信仰的性質が強く、それがまた、早くから仏教の教義や儀礼との習合を容易ならしめ、祈願歌、讚仏歌へと発展したのである。

新羅の浄土思想を考察するに当り、註疏とか僧伝の他にも、郷歌等の歌謡の類と、それに関連して述べられる説話をも、慎重に検討を加え、考察しなければならぬと思うのである。本論では、二首の郷歌を例示しただけであるが、これからの研究課題の提起として、何らかの意味を持つものと思うのである。

1 郷歌の解説については、小倉進平『新羅郷歌と史読の研究』京城帝国大学法文学部紀要第一号、一九二九、梁柱東『朝鮮古歌研究』博文書館、一九四二、等がある。

2 『三国遺事』卷二・紀異第二に五首、卷三・紀異第三に一首、卷三・塔像第四に一首、卷四・義解第五に一首、卷五・感通第七に四首、卷五・避隱第八に二首ある。大正藏經第四九卷所収赫連挺編著『均如伝』（具名・大華嚴首座円通両重大師均如伝）所収。

4 註1の両者を主に使う。

5 梁柱東『前掲書』の釈詞の和訳。ここでは、増訂重版本（一

潮閣・ソウル、一九八一）に依る。四九七頁以下参照。

6 傍点は筆者が付けたもので、日本の万葉仮名のような、新羅語の借字である。

7 『三國遺事』には仏教的説話が多く述べられており、浄土を祈願する説話も少なくない。主に、卷三・塔像第四、卷五・感通七、避隠八を参照されたし。

8 「願往生歌」という歌名は、小倉進平「前掲書」で始めて付けられ、以来、その他の論著にも使われている。

9 『三國遺事』卷五・広徳嚴莊条参照。  
大正蔵経第三七卷所収。

10 当時、唐の浄土教の隆盛の影響を受けてか、新羅でも、法位、元曉、義湘、玄一、円測、憬興、義寂、太賢等の註疏があ

11 について著わされた。惠谷隆戒著『浄土教の新研究』山喜房仏書林・一九七六、五五頁参照。

12 『宋高僧伝』巻第四、大正蔵経第五〇巻七三〇頁中。  
このように歌い、かつ、踊りながら愚民を教化し、千村万落

13 の貧しい庶民を始め、浮浪の輩に至るまで、皆仏陀の号を知り、南無の号をなすに至った。『三國遺事』卷五・元曉不羈条参照。

14 この前の部分は抄訳であり、兜率歌も省略し、弥勒説話も省略した。

15 『三國遺事』卷三・「南白月二聖、努勝夫得・恒恒朴朴」条の説話の内容は、「夫得と朴朴はそれぞれ弥勒仏と弥陀仏を勤求し、礼念した。後に、観音の化身である娘に對する侍遇の施し方により、先に夫得が成仏し、弥勒仏となった。朴朴は嘆き、弥勒仏（夫得）に稽首し、同じく成仏し、無量寿仏となった」というものである。

16 註5の前掲書の五四〇頁以下参照。  
傍点は新羅語の借字。註6参照。

17 「祭亡妹歌」の後に続く叙述である。

18 三品彰英「新羅の浄土教」『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』一九六一、七三九頁参照。

19 新羅郷歌に於ける浄土思想（康）  
（東京大学大学院）

掲載されなかった諸氏の発表題目（六）

証真教学に関する一考察 瀧川善海（大正大大学院）

安然研究(1) 小林明美（大阪外語大） 最澄「決権実論」について 田村晃祐（東洋大） 岡山金山寺聖教史料について 小此木輝之（大正大） 『声字実相義』に関する一考察 松丸俊明（大正大大学院） 『三教指帰』にみられる仏教思想 —— 弘法大師教学の原始形態 —— 品田聖宏（大正大大学院） 弘法大師と法華八講 武内孝善（高野山大） 弘法大師の文章における否定表現 静慈園（高野山大） 『決定往生集』における修行相について 坂上雅翁（大正大総合仏教研究所） 増賀上人伝の新資料 —— 増賀上人夢記 —— 阿部泰郎（元興寺文化財研究所） 二十五三昧式成立考 西村岡紹（叡山学院） 西山証空の念仏観 堀本賢順（西山短大） 一遍聖の名号観(II) 石岡信一（時宗教学研究所） 善導における仏性について 小林尚英（大正大） 法然上人門流における師資相承論 明山安雄（仏教大） 退耕行勇に関する史料 中尾良信（曹洞宗宗学研究所） 日本仏教の原点 角田春雄（駒沢大） 中世曹洞宗の展開 —— 特に豊後を中心として —— 青龍宗二（駒沢大） 『正法眼蔵』解釈の基本問題 杉尾玄有（山口大） 宝慶記にみる若き道元 遊亀教授（龍谷大） 良寛禪と老荘思想 新井勝龍（駒沢大）